

ミュージアム 通信

猫の手を借りて 幸運を招こう！

[催事のご案内]

「秘めた赤、よりそう赤
一たかさき紅板締めの世界」開催

[かわら版]

親子ワークショップ展覧会のご案内

「浄るり町繁花の図」広重 画・国立国会図書館所蔵
浄瑠璃の登場人物になぞらえて市井の様子を描く
7枚シリーズのうちの1枚。左上が丸め猫屋。



猫の手を借りて幸運を招こう！

なぜ猫は福を招くと
いわれるのか

来たる九月二十九日は招き猫の日である。「来る(九)ふ(二)く(九)」のごろ合せて福を招く招き猫の日と制定され、各地で「福来る招き猫まつり」も開催されるようである。

猫が福を招く動物といわれるようになったのは、江戸時代に入ってから。絹糸を生産する養蚕農家や農作物を栽培する農家にとって、一番の天敵といえはネズミである。ネズミは特に蚕が好物で、卵であるが、幼虫であらうが、蛹(繭玉)であらうが何でも食べ荒らしてしまう。ネズミの存在は、大切に農産物を育ててきた農家の人々の悩みの種であった。天敵ネズミのそのまた天敵といえは、「猫」である。ネズミを撃退してくれる猫は、神様のような存在として石像を神社に奉納したり、神社からいただい

た猫が描かれたお札や絵馬を、神棚や蚕室に置いて拝むと「ネズミ除け」になると信仰されていた。その後、養蚕が衰退すると猫は商売繁盛の縁起物となる。

ただ顔を洗っていただけの福の神

縁起物である招き猫の特徴といえ、何と云ってもその招く形をした手である。

招き猫が手を上げている姿は、中国唐代の荒唐無稽な怪異記事を集録した書物『西陽雜俎』(八六〇年ごろ成立)に「猫面を洗いて耳を過ぐればすなわち客至る」猫が前足をあげて顔を洗い、その足が耳をすぎると客が来る」と書かれているのが由来とされている。この記述から手招きする猫が描写され、商売繁盛、千客万来、除災招福といったご利益と結びついた。

たしかに、猫が前足で顔を洗っている姿はとても

愛らしく、「こつちにおいでよ。」と呼ばれているようで、ついふらつと立ち寄ってしまったくなる。

招き猫発祥の地はどこ？

招き猫は、民間信仰から広まった縁起物といわれているが、発祥地といわれているところがいくつもあり、①京都府伏見稻荷②東京都世田谷区豪徳寺③東京都新宿区自性院④東京都台東区浅草寺および浅草神社(三社様)ゆかりの今戸焼丸メ猫などが代表例である。ほかにも諸説あるが、正しく定まっていない。今回はその中で唯一、文献資料や絵画資料、発掘された出土品、伝世品などの物的証拠が確認できる④今戸焼の丸メ猫について詳しく紹介する。

マルツとせしめる丸メ猫

丸メ猫とは、今戸焼で作られた招き猫で、背面腰の辺りに「〇にメ」の陽刻がある。これは、「金銭や福徳を丸く勢める」という縁起

担ぎの意味をもつ。丸

メ猫の形状は基本的

に、横座りて頭を正面向きにして

招くポーズをしている。

記録として残る最古の招き猫

藤岡屋由蔵『藤岡屋日記』(嘉永五年(一八五二)春の項に、浅草観音猫の由来が記されている。要約すると、「浅草寺梅園院境内でひねり土人形を生業としていた老夫婦の白ぶちの猫が、知り合いの飼っていた小鳥を殺めてしまったことに罪を感じ、自ら井戸に身を投げた。その後、老婆の夢に猫が現れ、殺めた非を詫び「今後はあなたを守りいかなる病でも全快させる」と告げた。仲間の今戸焼職人がこのことを知り、老婆に猫の土人形を作って渡した。老婆は喜び、猫の人形に座布団三枚



『うなみの友』(部分)(明治三九年・1906)に掲載の丸メ猫。右上に〇メと書き記されている。京都大学附属図書館所蔵

を敷き、魚を供えて毎日拝んでいたところ、たちまち病が治り、そのことが浅草寺三社権現(今の浅草神社)鳥居辺りで大評判になった。」という一件があり、この件を元にして「浅草随神門内の三社権現鳥居ざわに老女が現れ、今戸焼の猫を並べて商っている。これを「丸メ猫」とも「招き猫」ともいう。この猫は娼家や茶屋、音曲の席などへ多くの客を招き寄せてくれるというので、買い求めて信心する人が増えている。また、頼母子講・取引き無尽等でこの猫を信じると勝ちを独り占めに出来るという。または、難病の者はこの猫を求めて信心すれば治る。足腰は丈夫となり親

の敵も討てるようになる。盲人は目が見えるようになる。脚気になった人は両足がびんびんして、退屈のぎに小田原まで昼飯の初鯉を食べに出かけると、評判になり、飛脚屋から京都へ三日限りの早飛脚を頼まれ、数多の貸し金を丸メした(返済された)という噂もある。この欲の深い世にあつて、われもわれもと福を招き、丸メ、丸メ。丸メに客も宝も招き猫浅草内でこれ矢大臣」との記述がある。次に斎藤月岑『武江年表卷之九』(嘉永五年)に書かれている丸メ猫について。「浅草花川戸に住む老婆が、貧しさゆえに愛猫を手放した。その夜のこと、老婆の夢枕に手放した愛猫が現れ、「自分の姿を作り祀れば福徳自在となる」というお告げを残して去っていった。老婆はその猫の姿をした人形を今戸焼の土人形にして浅草寺三社



丸メ猫を売る床見世。こちらも嘉永五年(1852)制作。「浄る町 繁花の図」(部分)広重画・国立国会図書館所蔵

権現鳥居の傍らで売り出したところ、たちまち吉運を招く縁起物として人気となり、江戸の市井で流行った」とある。

ふたつの文献の内容は若干異なるが、老婆が三社権現の鳥居のそばで今戸焼の招き猫を売っていたというところは一致するので、老婆が浅草寺境内で招き猫を販売していたのは史実のようである。

では、実物を 見てみましょう

現在、丸メ猫は記録とし

て残る最古の招き猫であるが、この記録を裏付ける実物が現存する。

下の画像は、新宿区水野原遺跡から出土した丸メ猫である。水野原遺跡は、かつて尾張藩川田久保屋敷があった場所である(現在は東京女子医大)。川田久保屋敷は、安政六年(一八五九)に火事になったという記録があり、出土した丸メ猫には被熱した跡があるが、恐らくこの時の火事によって焼け出されたものと考

えられる。よって、水野原遺跡出土の丸メ猫は、安政年間より以前に存在していた(嘉永年間製作か)と見なされる。

全国に「招き猫発祥の地」という神社仏閣があるが、言い伝えは残っていないも、文献資料や絵画資料、そして当時の実物はほとんど現存していない。しかし、丸メ猫は記録としても造形物としても現存する最古の招き猫である。この



水野原遺跡出土の丸メ猫・新宿区教育委員会所蔵

ように文献資料・絵画資料・考古資料の三拍子が揃い、歴史的裏付けが実証できる点でも大変貴重な資料である。ぜひ、招き猫起源問題の真相が解明されることを期待する。

手の上げ方にも お作法が…

さて、幸運を招く招き猫だが、その手の上げ方にはバリエーションがある。右手を上げている猫は金運、左手を上げている猫は人を招くという意味がある。今戸焼の丸メ猫の場合、左右どちらかの手をあげており、決ま

りはないが、豪徳寺の招き猫は必ず右手を上げている。これは、豪徳寺の招き猫児は彦根藩二代藩主井伊直孝との関わりによるものである。武士にとって左手は不浄のものとされ、また武士の多くは右利きで左側に鞘を差すことが多かったので、豪徳寺の招き猫児は右手

を上げているのだそう。それから、もつと金運を高めるために小判を首から提げた招き猫もいるが、豪徳寺の招き猫児は小判を持っていない。理由は、「招き猫は機会こそ与えてくれるが、小判までついでくるわけではなく、機会を生かせるかは本人次第」という考え方からで、さすが質素で厳格さを重んじた井伊家ゆかりの招き猫である。

また、手を上げている高さによって、運やツキを呼ぶ確率が違ってくるらしい。頭の上の方まで高く手を上げている猫の方が、より運やツキを呼んでくれる招き猫ということなので、購入の際の参考にされてはいいかだろうか。

ただし、ごくたまに両手を上げた欲張りな招き猫がいるが、「お手上げ」という意味になり嫌われる傾向にあるそうなのでご注意願いたい。

■ 催事のご案内

手仕事ギャラリー「秘めた赤、よりそう赤ーたかさき紅板縮めの世界」

2018年10月13日(土)～11月11日(日)開催 観覧料無料

江戸時代から続く紅作りの「技」を守り伝える伊勢半本店は、伝統を継承する若手作家支援を継続して行ってきました(「未来の匠」展事業)。

これに続く支援企画として、「手仕事ギャラリー」と題し、継承の困難な「日本伝統の技」を未来へ残そうとする活動や、途絶えた伝統技法の復元に尽力する取り組みなどを、作品と併せて紹介します。

今回は、昭和初期に途絶えた紅板縮めの技法を復元し現代に甦らせた「たかさき紅の会」の活動をとり上げ、紅板縮めの絹布と、染め絹を使い制作した作品を展示します。

「紅板縮め」は、模様を彫った型板に白い絹布を挟み、板を締め、赤い染料を掛けて染め上げる技法です。麻の葉や菊、牡丹、鶴など連続する模様が美しい染め絹は、着物の裏地や襦袢の上に着込み体を保温する間着に使われていました。

絹どころとして名高い上州。その高崎に弘化二年(一八四五)に創業した「吉村染工場」は、明治二二年(一八八九)に紅板縮めを開始し、第五回内国勧業博覧会で作品を発表するなど、この地の染色業を牽引する存在でした。しかし、和装の需要減少等により昭和七年(一九三二)に工場をたた

みます。以降、紅板縮めの型板や道具類は吉村家で大切に保管されてきました。平成に入り、吉村家後裔の吉村晴子氏は、この型板が在野にある意味を問い「たかさき紅の会」を主宰し、途絶えた技術の

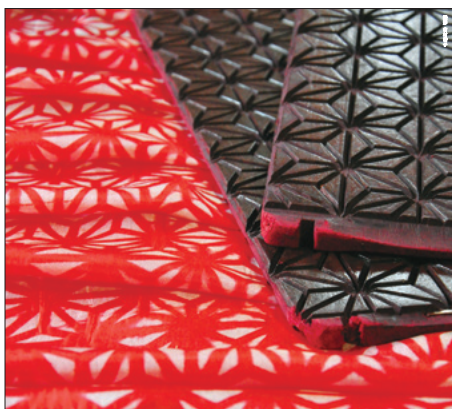
復元に取り組みます。「型板に白絹を挟み締めやぐらに掛けて赤染料を柄杓にて掛ける」というわずかな記述を手がかりに、白絹のたたみ方、板を締める力加減、柄杓で染液を掛ける回数、温度など、古布と見比べながら少しずつ変更を加え試作を重ねました。苦心の末に辿りついた鮮やかな薄絹の数々と活動の軌跡、そして未来へと「創造」を膨ら

ます作品を、この機会にぜひご覧ください。

【休館日】
毎週月曜日
【開館時間】
10時～18時(入館は17時30分まで)
【協力】
たかさき紅の会
たかさき紅の会代表 吉村晴子
【併催企画】
■ギャラリートーク
2018年10月21日(日)、27日(土) 各日14時～15時
講師：吉村晴子氏(たかさき紅の会代表 定員：15名当日先着順)
■ちよこつワークショップ「紅珠づくり」
2018年10月21日(日)、27日(土) 各日10時30分～12時(入場自由)
講師：たかさき紅の会
材料費：ひとつ1000円

たかさき紅の会」の活動をとり上げ、紅板縮めの絹布と、染め絹を使い制作した作品を展示します。

「紅板縮め」は、模様を彫った型板に白い絹布を挟み、板を締め、赤い染料を掛けて染め上げる技法



手仕事ギャラリー
秘めた赤、
よりそう赤
たかさき
紅板縮め
の世界

2018.10.13 SAT ~ 11.11 SUN
休館日：毎週月曜日
開館時間：10:00～18:00(入館は17:30まで)
観覧料：無料
主催：伊勢半本店 紅ミュージアム
【協力】 たかさき紅の会 / たかさき紅の会代表 吉村晴子

伊勢半本店 紅ミュージアム
東京都港区南青山6-6-20 本丸南青山ビル4F
TEL: 03-5467-3735 <http://www.isehanhonten.co.jp>

Information かわら版

開催中! 展覧会
「みんなでみようワークショップ」
8月24日(金)～9月17日(月・祝)
「いろのふしぎ」-さわって・えがいてワークショップ-で、絵具とからだを使って子どもたちが描いた作品が、美術家・前沢知子氏により生まれ変わり、展示されています。光を通して浮かび上がる「いろのふしぎ」をぜひお楽しみください。(入場料無料)



紐替え絵画 2018 一問一(部分)

Since 1825
伊勢半本店 紅ミュージアム

●開館時間/10:00～18:00 ●休館日/毎週月曜日
(月曜日が祝日または振替休日の場合は、翌日が休館日となります)

東京都港区南青山6-6-20 K's南青山ビル1F
TEL&FAX: 03-5467-3735
東京メトロ銀座線・千代田線・半蔵門線
「表参道」下車B1出口より徒歩12分

<http://www.isehanhonten.co.jp>